

図書館員が行く!



～小諸市内で行われたイベントを図書館職員が体験。内容を報告します～

小諸市は現在ではあまり知られていませんが、市内の豪商・高橋平四郎が県内で初の民間資本の製糸工場を創業するなど一時期は10以上の製糸工場が操業し、「糸都」(しと)と呼ばれるほど養蚕が盛んな地域でした。そうした養蚕の歴史と和の文化を伝えていく活動をされている、NPO糸のまち・こもろプロジェクト主催のイベント「絹糸ができるまで」に行ってきました。



会場に入ると入口のすぐ近くに‘お蚕さん’が桑の葉を食べています。養蚕の時期は初夏から夏と思っていたのですが、晩秋のこの時期にも飼育期間があるんですね。‘お蚕さん’の隣には繭の入ったカゴが。



繭から糸を取る最初の工程が「座繰り」といいます。15分ほど煮た繭からホウキで糸目を見つけ、それを専用の用具で繰っていきます。一つの繭からは1500メートルに糸が取れるそうです。繰る繭の数が多いと太い糸になり帯などに、少ないと細い糸になり羽二重などに使われます。

繭から出た細い糸が一本の糸になっていくのはとても不思議な光景。途中で繰る糸の数を増やすと他の糸に絡んだ瞬間‘くっ’と手応えがありました。今回は体験なので繭の数もあまり気にしませんが、実際に繰る場合は繭の数を一定にし、糸の太さを均一にするのだそう。一瞬も気をにけません。使っている道具ややり方はとてもアナログですが、実は繊細な技術なのです。



糸に加工できない繭もけして捨てません。1時間ほど煮て柔らかく揉みほぐし、切れ目を入れたところに手を入れて四角に広げていきます。これを木枠に何枚も重ねていくと真綿ができます。長野県内は四角に広げる角真綿ですが、東北地方に行くと、袋状に広げ、結城紬の材料になる袋真綿という技法もあるのだそうです。

続いて体験したのがりんご染め。りんごの木の皮などのチップを煮出した液に、糸や輪ゴムで絞り模様をつかったものを入れ15分間煮たあと、みょうばん液の中で5分媒染。りんごの果肉のような薄黄色に染まりました。



糸のまち・こもろプロジェクトでは、このあとも、次のようなイベントを計画されています。会場はいずれも本町の塩川邸宅の空き店舗です。興味のある方は糸のまちこもろプロジェクトの清水寛美さん(090-4158-8088)へ。

12月6日(日)13～16時「シルクの魅力・未来」(講演者:岡谷蚕糸博物館の高林館長)

2016年1月10日(日)13～15時30分「世界遺産・富岡製糸場と小諸の深いつながり」(講演者:富岡製糸場総合研究センター長の今井所長)